

## 立教大学外国語教育研究センター・シンポジウム

### 「英語スピーキングテストについて考えてみよう」(2023年4月15日開催)

第2部パネルディスカッション：

「スピーキング能力向上につながるスピーキングテスト・英語授業・英語学習」

パネリスト：

澤木 泰代 氏 (早稲田大学教授)

小泉 利恵 氏 (筑波大学教授)

布村 奈緒子 氏 (ドルトン東京学園高等部副校長、中等部・高等部英語科教諭)

福田 恭久 氏 (東京都立西高等学校英語科教諭)

中津原文代 氏 (英国ベッドフォードシャー大学教授)

司会：

新多 了 (立教大学教授・外国語教育研究センター副センター長)

新多：大きく3つの観点で話をお聞きします。今日はたくさんの小・中・高・大の先生方にきていただいていますので、最初に教師の視点から授業やテストについてお話をおうかがいします。さきほどの発表でもいくつかの事例を紹介いただきましたが、スピーキング力を伸ばすために授業で行う効果的なスピーキング活動について教えてください。

#### 「授業」で行う効果的なスピーキング活動

中津原：さきほど小泉先生が紹介して下さったグループで行うスピーキングテストはとても素晴らしいアイデアだと思います。2人の先生が授業内でdouble ratingを行いながら、グループごとに回って評価する方法です。私も博士課程の研究でグループスピーキングテストについて研究したことがあります。その時に「Information Gap Task」や、いくつかのアイテムの良い点・悪い点を話す「Ranking Task」や、トピックを与えて自由に話す「Discussion Task」を検討しました。

その研究では3人グループと4人グループの違いについても調査しました。また、グループ内の生徒の外向性・内向性や、スピーキング能力がグループでの談話にどのような影響があるかについても調査しました。「Information Gap Task」を使って、最初にそれぞれが持っている情報（例えば「カメラについての情報」）を交換した後で、「クラスにどのカメラを買うのが良いか」について話し合うと、シャイな生徒や英語が苦手な生徒も積極的に参加して話してくれました。自由度が高いタスクでは社会的な生徒は話す機会が増えます。一方、「Information Gap Task」のように必ず話さなければならない状況から始めることで、全ての参加者から話を引き出し、会話への貢献を促すことができることが分かりました。

また、4人グループの方が一度に多くの生徒のテストが行えるという点で便利ですが、私は3人グループがおすすめです。4人だとおとなしい生徒が黙ってしまうことがありますが、3人なら積極的に協力した話し合いになりやすいです。テストではない普段の4人の会話の場合、4人で話すだけでなく、自然に2人ずつに分かれて話したり、会話の形態がダイナミックに変化します。しかし、会話分析で確認したのですが、スピーキングテストでは、自然に2人ずつに分かれて同時に二つの会話が進行するという状況にはなりません。そのため「私は～だと思います。What do you think?」「私は～だと思います。How about you?」といった具合に、4人の中で機械的に順番に発言を回すことになりがちです。一方、3人のテストだとおとなしい生徒も含めて話しやすく、やり取りも自然でした。もちろん、何人であってもテストを行うこと自体が重要ですが、選べるなら3人の方がおとなしい生徒も巻き込んで、全ての生徒から発言を集めることができるのではないかと思います。

澤木：私は少し視点を変えて、スピーキング活動後に自己評価をどのように行うかについて話したいと思います。発表ではAIを使ったテストについて話をしましたが、これはもっとローテクな方法です。今は簡単に録音や録画ができます。例えば、授業でスピーキングタスクを行う時には、パワーポイントを使って指示を与えて、そのファイルに録音をしたものを埋め込んで、自分で自分の英語を聞くように伝えます。自分の英語を繰り返し聞くことで、例えば自分が2つの理由を述べているつもりだったのに実際にはそうになっていなかったり、自分ではしっかりと発音しているつもりで単語が聞き取れないなど、様々な発見が得られます。このように、評価活動を組み合わせながらスピーキング学習を行うことが重要だと思います。話す機会としてももちろん大切ですが、一つ一つ丁寧に振り返りながら、何ができたのか、どこができなかったのかを確認しながら進めることが大事です。

また、先ほども話題に上がりましたが、評価の観点やルーブリックも、学生が自己評価をする際には細かく分けて提示するとわかりやすいと思います。例えば、一般的なルーブリックでは「話した内容は十分にタスクに合っていた」といった説明が多いかもしれませんが、自己評価用にはもっと細分化した説明を作ります。例えば、「自分の意見を述べて2つの理由を付け加える」というタスクなら、「自分の意見が言えたか」「理由の1つ目が言えたか」「理由の2つ目が言えたか」と具体的な項目に分けて提示することで、学生はチェックリストを使いながら振り返り活動を行えます。

小泉：中津原先生はグループテストは「3人」で実施することを薦めておられました。3人グループでは、2人では出てこない発話を引き出せたり、相手に会話を譲ったり、深めていったりするやりとりが見られるなどの利点があります。そういった利点を理解した上で、私は初期段階のテストは2人ペアが良いと思います。3人だとおとなしい生徒の場合「私はいいや」となりがちです。一方、2人なら逃げられませんし、その中でどう話すかを見ることができます。

私のテストでは「Spot the Difference」というタスクを使って、「2枚の絵を見て、できるだけ多くの違いを見つけなさい」という指示で行いました。一般的な「意見を言いなさい」というタスクの場合、分かったふりをして会話を進めて、何とか3分間話し終えようという気持ちになりがちです。しかし、このタスクを使うと、コミュニケーションスキルやストラテジー、質問する能力が必然的に見えてきます。つまり、このようなタスクを使うことで学習の成果が明確に見えてきます。ただし、このタスクだと現実的な状況設定が難しいので、その点では少し工夫が必要ではあります。

布村：私も2人ペアのテストをお薦めします。先生方の中には頻繁にペアを変える方もいらっしゃるかもしれませんが、私は毎回の帯活動の中で、最初の5分から10分ペアを代えながら、たくさん話す機会を作ります。そうしたウォームアップの活動を通じて、「英語で話すことが当たり前」という雰囲気を作っていくことが一番大切だと考えています。

また、私がよく行う方法は、ロールプレイです。例えば、「Four Corners」をよく使います。これは、それぞれの生徒が異なる内容を読んでから集まって、一人ひとりが自分の内容の話をしてもらいます。その時、一人は「ディスカッションリーダー」として話のきっかけを作り、一人は「スピーカー」として「こういう話があったよ」と話します。そしてもう一人が「ア

クティブリスナー」として質問を返したり、「分からなかったから、言った文の最後の単語を繰り返してみて」と発言することで、みんなが参加している雰囲気を作ります。

もう一人の役割は、生徒たちの大好きな「リアクションメーカー」です。この生徒は「Wow」ばかり言い続けます。「Wow」「Fantastic」と言っているだけですが、そのうちにどうやって褒めればいいのか、様々な表現を考え始めます。本人は非常に簡単なことをしているだけと思っていますが、よく聞いていないと適切なタイミングで「Fantastic」と言えないのです。ですので、実は、よく聞いていないといけない役割です。そういった役割を通じて、自分の発話をしながらその中にエンゲージしていく雰囲気をつくる、4人が支え合うグループの環境をつくるのが授業の中で大切だと思っています。

福田：ペアワークに関していえば、生徒の発話量を増やすことがとても重要だと思います。次々にペアを変える方法がとても効果的です。私の授業では、生徒のペアワークにJETやALTにも入ってもらうことがあります。何巡かすると必ず一度は外国人講師とのやり取りの機会が回ってくるので、生徒のモチベーションが高まります。ALTやJETが使った表現を生徒が真似して他の生徒同士で話すときに使うようになるのも利点です。

また、どのようなタスクを取り入れるかが、もう1つの大事な視点です。例えば、勤務校では全般的に生徒の認知的なレベルが高いため、分析・比較、問題解決型などがうまくいきます。やはり、生徒の態様にあったタスクの選択がポイントです。私がこれまでに経験した他の学校では、店員と客のロールプレイなど、演劇的な要素を取り入れたタスクが好評でした。もしかすると、このようなタスクを現任校で導入すると、生徒はすぐに飽きてしまうかもしれません。生徒の発話を引き出すには、教えている生徒の特性や認知スタイルをしっかりと見極めたうえで、タスクを選ぶことが非常に重要です。

### **スピーキング活動を実施する工夫**

新多：次に、授業運営についてお聞きします。例えば、立教大学では10名で行う「英語ディスカッション」の授業があります。このように少人数だとスピーキング指導を行いやすいのですが、実際の授業では30～40名、あるいはそれ以上ということもあります。また、生徒の英語力も様々です。そうした状況の中で、うまくスピーキングのタスクやテストを実施する工夫があれば教えてください。

福田：40名授業の場合は比較的大きな会議室を使って、20名ずつに2つに分かれて行っています。長机を縦に並べて20人ずつで、face-to-faceでペアワークを行います。1クラスにALTとJETが付いていますので、20名に対して教員一人ずつ担当できます。ただし、ALTがない場合は1人の教員で40人を担当します。その場合は、比較的広い教室で20人ずつに分け、アクティビティをローテーションで回して、生徒の発話を増やすように工夫しています。

布村：私もテストは20名ずつに分けて行います。先ほどは「やりとり」の話でしたが、発表活動やオーラルプレゼンテーションは中学1年生から高校3年生まで、年間6～10回行います。その中で必ず1分間スピーチを行って、評価するようにしています。スピーチも20名ずつに分けて、ALTまたはJETが評価します。1学期に2回実施しますので、必ず評価者が変わるようにします。全員の生徒が同じ評価者に必ず1回は評価されるようにして、その評価の内容を成績に反映させます。また、発表でご覧いただいたようなやり取りのテストも何回か行います。その際、グループの人数が大きくなると1回の授業で評価を終えやすくなります。一方、一人ずつのスピーチは時間がかかるので、1分以内に制限せざるを得ないのが悩ましいところです。高校3年生だと3～5分のスピーチを本当はさせたいところですが、1分にとどめて回数を増やすことで、スピーチを行うことが当たり前という雰囲気を作ります。そうすることで、前回の振り返りを次回に生かすことができます。年に1回だと振り返る機会がなく、前回の失敗を次に生かせないので、年間に複数回行うことで、1分でより多くの内容を話すことができるように実施しています。

## **民間試験の活用**

新多：英検、ケンブリッジ英語検定、IELTSなどの民間試験の活用について、何か取り組みの事例があれば教えてください。

中津原：イギリスの大学ですので、ほとんどの留学生はIELTSを受けています。例えば、ビザを取得するためには最低でもCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）でのB1に該当するスコアが必要ですし、大学に合格するには、それぞれの大学や学部が必須とするスコアが必要です。それらの試験に加えて、各大学独自で作成したテストを追加で実施することがあります。例えば、大学の授業では、たくさんのテキストから重要な要素を見つけ出して英語で要約をしたり自分の意見を書くという課題が出ます。ですので、独自に「Reading into Writing」のテストを作成・実施して、「あなたはもう少しin-sessional course（学期中に追加で

受講する英語の授業)を受講したほうが良いですね」といったフィードバックを行うことができます。IELTSのような大規模な試験に合格しても、大学の授業や課題に必要な英語力を身に着けるには、更なるサポートや努力が必要になってきます。

また、日本の大学も同様かもしれませんが、イギリスの大学は多くの留学生を受け入れています。大学としてはできるだけ多くの学生を受け入れたいところですが、一定の英語力がなければついてこられず、他の学生にも影響が出るので、授業を担当する教員は受け入れには慎重です。しかし、入学試験の担当者や国際交流担当者はできるだけ受け入れたいという意向を持っていますので、両者の間で適切なバランスをどこで見つけるかという問題もあります。

新多：日本の中高では、英検などをうまく活用して生徒に取り組みせることがよくありますね。

布村：以前勤めていた両国高校は「グローバル10」ではなかったため、東京都の補助を受けることができませんでした。そこで、中学1年生から高校3年生までGTECを導入することにしました。その時、スピーキングを中心とした英語の授業を展開していくと、GTEC全体の点数がどんどん上がっていきました。当時のGTECはスピーキングセクションがなく他の3つの技能だけでしたが、その中で最も成績が向上したのはリーディングでした。Words per minuteや日本語を介さずに文章を読む速度が上がり、リーディングスコアが向上しました。大学入試でもリーディングが主要な要素です。速読力が高い生徒たちは難関大学にどんどん合格することが数字でも示されて、最も効果が上がったと思います。このような結果を基にして、GTECや4技能の導入を学校や保護者に説明し、了解してもらいました。公立学校では実際にお金を出してもらって4技能の試験を受けさせるとなると、費用の面でGTECが唯一の選択肢でした。

現在、私が勤めるドルトン東京学園では、ケンブリッジ英語検定も導入しています。この試験は小学校1年生から高校生まで、それぞれのレベルに合わせて評価できるため、世界的な信頼が高いのはケンブリッジ英語検定だと考えています。ドルトンはとても自由な学習スタイルで、生徒は授業中も自由に動き回ります。ですので、話すことに抵抗感は全くありません。ただし、一番下のスタンダードクラスの生徒たちはとても元気で、座学があまり好きではありません。ケンブリッジ英語検定には最初のレベルからスピーキングが含まれているため、そうした生徒たちもスピーキングテストの評価を得ることができます。スピーキングの

評価は3つのスターで示され、3つのスターが全て埋まると、「俺、スピーキングできたぜ」という感じになり彼らのモチベーションも高まります。

これまでスピーキングテストの導入について議論されてきた中で、ペーパーテストで優れた成績を取っていた生徒が、スピーキング試験では成績が下がってしまうという観点で話されることが多かったと思います。一方、逆のケースもあることを理解していただきたいと思っています。話すことは大好きで文章を書くことが苦手な生徒たちも、スピーキングの評価がないことで「英語が苦手」というカテゴリーに入れられていました。そういった状況もあったことを知っていただきたいと、私は現場で感じています。

福田：勤務校の生徒はケンブリッジ英語検定を受けています。「G20」に指定されているので、生徒の費用負担はありません。私がこれまでに担任をした学年の生徒は、1年次と2年次の12月に試験を受けました。スコアを比較することで、それぞれの技能のスコアの変化と授業との関連を分析することもできます。そのような意味で、民間試験の活用はメリットがあると感じています。

小泉：外部試験結果をどう生かすかについて、3月まで勤めていた清泉女子大学では独自のスコアレポートを作成していました。企業が提供するスコアレポートも分かりやすいものですが、足りない部分がありました。そのため、学生が理解しやすく、将来の就職活動などにどう役立てるか、また今後どのように取り組むか明確になるよう、スコアレポートを作って提示していました。

### **スピーキング力を伸ばす「学習」**

新多：次に2つ目の「スピーキング力を伸ばす学習方法」に移りましょう。私たちは英語学習者でもあるので、これまで自分が実践して効果のあった学習法や、研究に基づいたアドバイスがあれば教えてください。

澤木：私自身、中学校までは英語がとても好きでしたが、スピーキングは苦手でした。ただ、上達したいという気持ちは常にありました。私が効果を感じた学習方法は2つあります。一つは、フォニックスをしっかりと勉強することです。音とスペルの関係を理解し、自分が話すときに正確に発音できるように意識しました。

もう一つ大事な点として、話す内容や話の構成、伝えたいことをうまく伝える順序などは、ライティングと連動していると思います。私の世代では20代の頃にEメールがよく使われるようになりました。友人や大学院の先生、友人同士でメールのやりとりをする機会が多くなりました。ですので、話したいことがあるときには、まずメールでその内容を書くことがリハーサルになり、それが準備になって後でスムーズに話せるという経験を繰り返すことによって、スピーキングに慣れていったという実感があります。つまり、スピーキング力はリーディングやライティングとも繋がっています。リスニングについては、上手な人の英語を聞いて、それを参考にするということはもちろんあったと思います。でも、私の場合は、特にリーディングとスピーキング、ライティングとスピーキングが密接につながっていると感じています。

小泉：私も同じ観点ですが、スピーキング後に振り返りをするのが重要です。自分ができたことやできなかったこと、そして言いたかったけれど言えなかったことを確認し、次に生かすために「こう言えばよかった」という点を意識しています。私は自身の学習経験から、学生や生徒にも同じように伝えています。

布村：私の授業では話す量を増やすことに注力しています。50分の授業のうち、生徒が7割の時間を話すようにしています。それが大事な点です。

福田：タスクの繰り返しや、繰り返しの合間に「振り返り」を取り入れて生徒の「気づき」を促すことが重要です。また、生徒がペアワークなどインタラクションの場面で少しでも長く会話を続けられるよう、あらかじめ「語彙リスト」を作らせています。生徒はタスクの中で自分が使う語彙を予想し、辞書を使ってリストを作成します。授業では、そのリストを見ながらスピーキングを行います。実際に話してみて、出てこない単語があれば調べ、語彙リストに追加していきます。生徒は、いかに語彙が重要かを認識しながら、語彙を増やしていきます。そうすることで、流暢さも増していくと思います。

### **スピーキングテストの課題と未来**

新多：3つ目の観点として、スピーキングテストの課題と未来についてご意見を伺います。特に英語民間試験（英検、TOEFL、IELTSなど）について、現状の課題と今後の改善などについてご意見をいただければと思います。

中津原：現在、言語テストの研究で非常に重要だと言われているのが、「ローカライゼーション」という考えです。例えば、アメリカやイギリスなどで作られたテストをそのまま日本やシンガポール、中国などに持ち込むのではなく、それぞれの学習者の環境や背景に合わせて適切に活用しようという動きが進んでいます。これは素晴らしい取り組みだと思います。

最近私が関わったプロジェクトでは、ウルグアイの小学生と中学生全員に受けてもらうテストを作り、研究を行いました。ウルグアイの教育はとても進んでいます。コロナ禍の前から生徒たちにタブレットを配布し、ビデオ会議システムを使った授業も行われていました。その国からタブレットを使ったテストを行いたいという要望を受け、一緒にテストを作成しました。その際、イギリスにいる私たちが一方的に「こうしてください」とテストの仕様を提案するのではなく、現地の教科書や学習指導要領を参考にし、現地の先生や団体、政府関係者の皆さんと意見を交換しながら協力してテストを作りました。

ローカライゼーションの一例として、小学生は普段スペイン語訛りの先生の英語を聞いているため、リスニングテストではアメリカ英語やイギリス英語ではなく、ウルグアイの先生が話す英語を使用しました。また、スペイン語と英語では類似語が多数あります。例えば、「hospital」という単語はスペイン語でも綴りは同じですので、リーディングでしたら、CEFRのPre-A1のレベルでも十分理解できます。そのように、現地の先生たちと共同して、対象者により適した問題を作成しました。大規模テストの課題と未来という質問に対しては、「ローカライゼーション」が鍵になるとお伝えしたいと思います。

澤木：英語民間試験に限らず、もう少し広い視点でお話させていただきます。今後起こりうる変化として、私はスピーキングテストがもっと身近な存在になると思います。これまでは試験を受けるためにどこかに行かなければならなかったのが、コロナ禍の3年でかなり状況が変わりました。技術の進歩によっていつでもどこでもスピーキングの練習ができるようになり、発音の練習がソフトウェアなどで可能になったことなどが主な要因です。今後、さまざまな場所以对話型のテストを自分で受けることができる環境が整ってくると思います。

ただし、テストが身近になる一方で、テストを受ける意義をよく理解し、練習と評価を継続していくことが重要だと思います。つまり、テストが何を測定しているのか、テストで何が評価できて、何ができないのか、またAIなどの技術を使ってできることとできないことは何かしっかりと理解しながら、学習者が練習を続けていくことが重要だと思います。もちろん

学習者自身がそういった自己分析や考察を行うことは難しいので、私たち指導者や研究者が多くの情報を伝えていくことが重要です、お手伝いできればと思っています。

小泉：今後は、テスト受験者や保護者、学校・教育関係者、テスト作成者、テスト実施者など、テストに関わるすべての方々の間での、双方向のコミュニケーションが必要だと思えます。専門的な情報があっても、それを一般の方々が理解できるとは限らないので、それをわかりやすい言葉で伝えること、そして疑問点を質問しあって相互理解を深めることが重要です。また、テストが授業の中で学習のために行われる形成的なものから、徐々に大きな影響力を持つものになっていくと、実施上の様々な課題が生じます。そのため、少しずつでもコミュニケーションの機会を増やしていく必要があると思えます。

たとえば、お手伝いさせていただいたある高校では、初年度は成績に反映させずに形成的な評価のみ行っていました。それがうまくいき、他のクラスでもテストを受けたいという声が出てきたので、次の年から成績に反映させるようにして、次第に他の学年にも広げていきました。このように、コミュニケーションをとりながら少しずつ広げていくアプローチを取ることで、理解が得やすくなると思えます。

布村：AIの急速な発達により、テストが身近になってくると思えます。例えば、アメリカではDuolingoが一般的な大学入試にも使えるように急速に普及しています。このように、コンピューターで簡単に判定してくれるような試験が増えています。スピーキングは判定が難しいという思い込みがありましたが、新型コロナウイルスの影響とAIの急速な発展により、その考えはもうなくなるのではないかとと思っています。

例えば生徒が利用しているLMSでも、Teamsの中で生徒の音読を録音すると「発音の正確率は70%です」と自動的に評価してくれます。この機能を使って音読テストを行ってもらいました。「7つの音読の課題を70%以上の正確率で提出してください。それを全部提出したらA+です」と言ったら、全員の生徒がやってきました。こういった経験から、AIの助けを得ながらスピーキングをどんどん行える時代になってきたと思っています。

福田：以前に比べると、生徒にとって民間試験が身近になっているように思われます。生徒に対して「受けなさい」とうるさく言わなくても、英検などの試験を受ける生徒が増えていると実感しています。ただ、勤務校の生徒の場合、大学入試のためというよりは、自分で自

分の英語力を診断したいという、英語学習のペースメーカー的な使い方をしています。英検であれば、2級、準1級、1級を目指して試験を受けている生徒が増えています。

課題といえば、受験料が高いことです。最近も値上がりしましたが、これ以上の費用増加は望ましくありません。また、生徒が普段学習している領域とテストのデザインがどれほど一致しているかが非常に重要です。これから様々なスピーキングテストが開発されると思いますが、その際にはぜひ、その点を考慮して取り組んでいただければと思います。

(聴衆からの質問)

### リスニング活動について

質問A：本日のテーマはスピーキングに関してですが、スピーキングができるようになるためにはリスニングも必要だと思います。リスニングの教授方法について教えてください。

福田：普通の授業では、リスニングに重点を置いています。教科書の単元の導入では、リーディングではなく、リスニングから始めています。これには賛否両論があるかもしれませんが、生徒には予習はあまりしてこなくてよいと言っています。なぜかという、読んで自分が理解できるものでも、リスニングから入ると聞き取れない、理解できない場合があるからです。リスニングから入ることで、何が原因で理解できないのか、音の問題なのか、語彙の問題なのか、文法の問題なのかなど、さまざまな要因を明らかにすることができます。

具体的には英語を聞きながらノートを取り、その後ペアで聞いた内容を英語で復元させます。その復元したものをふまえて、私が口頭で英問英答を行い、生徒の理解を確認します。その過程で、生徒にはリーディングから入ると気がつかない自分の弱点をしっかりと把握しなさいと伝えています。その活動の後に生徒は初めて本文を目で追いながら、リスニングします。その際、英語を聞きながら自分が聞き取れなかった箇所や英語で復元できなかった表現や語彙を確認します。その後、言語面・内容面について解説、生徒が音声認識と言語分析を行ったうえで、シャドーイングを徹底して行います。さらに、その後には「リテリング」を行い、内容を英語で話す練習をします。このように、すべての単元においてリスニングからスピーキングへと進めています。

布村：私は中2から高2までずっと教えていますので、学習レベルはさまざまです。まず、教員が英語を話すことが重要だと考えています。最近では、日本語を取り入れることが望ましいという研究結果も多くあるかもしれません。ただし、週に4～5時間しかない英語の授業では、英語の教員は簡単な英語やcomprehensiveな英語を使い、毎回同じフレーズで良いので英語を使って話すことが大事だと思います。毎回同じフレーズを聞くことで、中学1年生の初級者であっても「毎日天気のことを聞いているのかな？」など、わかる瞬間が訪れると生徒たちは言っています。「こういう意味かな」「こんなことを言っているのかな」と考え、「ああ、これだ」と思う瞬間が来るのを待ちます。時間をかけて納得するまで続けることが、リスニングスキルの向上に一役買っていると考えています。

また、高校生には生のニュースを聞かせることも多いですが、聞く目的を明確に提示することが重要です。先ほどロールプレイを紹介しました。その準備段階として「このようなニュースがあるけれども、どのような内容だと思うか」と質問を投げかけ、その後に「それに対してどのように考えるか」と話を展開していきます。リスニングの目的を明確にし、それに沿って授業を進めることを心がけています。順番としては、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの順で進めることを重視しています。

### スピーキングテストの入試への導入について

質問B：最近、東京都を皮切りに公立高校の入試にスピーキングが導入される動きがありますが、世間的な評価としてはあまり良くありません。2004年に岩手県の入試でスピーキングが導入された時は2年で廃止されました。現在のところ入試にスピーキングを導入することに対して好意的な評価は得られていないように思いますが、それは何が原因だと思われるか？そういった状況の中、今後スピーキングテストを導入するためには、具体的にはどのようにすれば良いでしょうか。私自身、テストに取り組む一人として非常に関心があり、質問させていただきました。

小泉：先ほどお話しした通り、テストを実施される側とテストを実施する側、テスト結果を使う側を含むテスト関係者同士のコミュニケーションが一番大切です。すでに情報があるにも関わらず、十分に伝えられていないため、残念ながら不信感を招いた点がありました。また、疑問に対して十分には答えられていなかったところもあります。そうした疑問に対しては情報を公開し、積極的に伝えていくことで理解が得られるのではないかと思います。もち

ろん細かい改善点もありますが、昨年度の結果を踏まえた今年度の計画を立て、しっかりと情報を提供していく必要があると思います。

澤木：小泉先生のおっしゃる通り、コミュニケーションの問題は確かにあると思います。入試でスピーキングを行うことが必ずしも一番良い方法かはわからないのですが、中学校や高校での学習と実際のテスト内容がある程度つながっていることは必要だと思います。ですので、高校のカリキュラムでスピーキングを行っているのであれば、その能力が試される機会があるべきだと思います。この意味では、今回の試みは一步前進だと思います。ただ、実際にテストを実施するとさまざまな問題が明らかになってきます。ですから、改善点を整理し、すぐに対処できる問題と、長期的な検証が必要な問題をしっかりと整理し、情報公開を行いながら検討していく必要があると思います。

中津原：世界中のどのテストを見ても、必ず改善点はあります。ただし、少し悪いところがあるからそのテスト全てを否定するのは、今まで積み上げた知見や、テストがあることの教育的意義を見過すことになります。私が学生だった30年前と比べてみると、学習したことをテストで測って、本来学習指導要領で学ぶべきことに近づけようとする試み自体は、生徒にとっても教員にとっても素晴らしいことだと思います。ですので、少し悪いところがあるからといって全否定するのではなく、建設的な方法で、「このテストのこの部分が良くないなら、このタスクを修正してみよう。こうやって採点してみよう。」という具体的な提案をみんなで行うことが大切だと思います。一人ひとりが「反対」や「賛成」のどちらか一方に分かれるのではなく、みんなで良くしていこうという姿勢が大事だと思います。

実は、私もテストへの恐怖心が非常に大きい生徒でした。当時の私のように、一度失敗してしまうと人生が変わってしまうのではないかという不安を持つ生徒も多いと思います。ですので、テストを何度も受ける機会を作ることは、そうした生徒にとっても良いことですし、次回また頑張ろうという気持ちが生まれるのではないかと思います。

### シンポジウム参加者へのメッセージ

新多：最後に各先生から今日の感想やメッセージなどお願いします。

福田：現在学校の現場は、非常に忙しいです。新しく学年担任を経験するたびに、仕事が増えていることを強く実感しています。私の願いとしては、これ以上余計な仕事を増やさない

でほしいと思っています。その分の時間とエネルギーを毎日向き合っている生徒に最も適したスピーキング等の教材の作成、指導法の開発にあててほしい、そうあるべきだと思っています。そのためには、教員同士の意見交換や連携が必要です。そこには教員としての学びがたくさんあります。それこそがよりよい英語教育を実現するために必要なことだと思っています。

布村：今日このような場でスピーキングを授業に取り入れる話をさせていただけたことは非常に貴重な時間でした。ただ、スピーキングがまだ特別な存在として捉えられていることに、少し残念な気持ちもあります。ですので、スピーキングを授業で行うことは普通のことだという認識をもっと広めていきたいと思っています。私の卒業生の中に英語の教材を販売する出版社に勤めている教え子もたくさんいます。そうした卒業生の一人に会った時に、「学校を訪問すると、英語を話す声が聞こえてこない」と驚いていました。このような話を聞きながら、啓発活動をしていかなければならないと感じていたところ、このように久しぶりに対面でお話する機会をいただきました。本日はありがとうございました。

小泉：私も高校の授業研究などで他の学校を訪れる機会がありますが、スピーキングテストを実施すること自体がまだ特別な学校が多い印象を持っています。まずは、プレゼンテーションでも良いので年に1回でも試すことから始めてみる。その後、可能であれば「やり取り」の評価にも広げていく。最初はルーブリックもシンプルなものでも十分です。実施してみてももう少し詳しく見てあげたいところがあれば、そこを広げていくという方法が望ましいと思います。熱心な先生ほど、初期に全力で取り組んでしまうことで、これは続けられないと、継続を結局諦めてしまうことがよくあります。そうではなく、できる範囲の小さなステップで実施と採点を行い、可能であれば夏休みの課題や授業外にも広げていけると良いと思います。そのような形で生徒が話す機会を増やしていくことが、スピーキング力の向上につながります。通常の授業内での会話だけでなく、テストのように緊張した状況で話すことも非常に良い訓練になると思います。

澤木：本日はスピーキングについて、様々な角度からお話を聞くことができ、私もとても勉強になりました。先ほど、スピーキングテストが身近な存在になっていくのではないかと話しましたが、そうなってほしいというのが私の願いです。気負わずにたくさん話すことで、学習者にその過程を楽しんでほしいと思います。そのためにできることを、言語テストの視点から支えていければと思っています。

私は普段フィードバックや採点の研究をたくさん行っています。パフォーマンステストが広がっていく中で、採点やフィードバックについての悩みを持つ先生方もたくさんいらっしゃると思います。それに対して、言語テスト研究の「Learning-oriented assessment (LOA)」という分野で言われていることを一つご紹介しようと思います。LOAでは、フィードバックを与えるのは教員だけでなく良いと考えられています。先生が全て背負い込む必要はなく、学習者自身や、「ピアアセスメント」と呼ばれる相互評価活動で、学習者同士もフィードバックを与える主体になることができます。私はこの考え方に賛成です。異なる視点からのフィードバックを得ることもとても良いことだと思います。ですので、今後このような活動がますます広まっていくことを期待しています。

中津原：本日はこのような貴重な機会をいただきありがとうございました。他の先生方や聴衆の皆様から様々なことを学ぶことができ、私にとって忘れられない経験となりました。今年には私にとって日本とイギリスに滞在する年数がちょうど半分になる年です。そのため、テストの研究に取り組もうと思ったのが、（発表の中で紹介した）Arther Hughesの論文の一節を見たときでした。そこに書かれていた通り、「テストは学習に良い影響も悪い影響を与えてしまうこともある」ことをこれまで身をもって感じてきました。その経験が少しでも良いテストを作りたいと思い研究に取り組んでいる理由でもあります。今回、私にとって特別なタイミングで誘っていただき、皆さんとお話する機会を得ることができ本当に感謝しています。ありがとうございました。

新多：以上で終了とさせていただきます。本日はお忙しい中お越しいただき、ありがとうございました。